2017年
12月5日
火曜日

「船出」のために

栗田　匡相　准教授（開発経済学）

「〈考える〉ことを、昔は〈かむかふ〉と言った。（本居）宣長さんによれば、最初の〈か〉には意味はなく、ただ〈むかふ〉ということだ、と。この〈む〉というのは〈身〉であり、〈かふ〉とは〈交ふ〉です。つまり、考えるとは、〈自分が身をもって相手と交わる〉ことだと言っている。だから考えるというのは宣長さんによると、つきあうことなのです。ある対象を向こうへ離して、こちらで観察するのは考えることではない。対象と私とがある親密な関係に入り込むことが、考えることなのです。人間について考えるというのは、その人と交わることなのですよ。そうすると、信ずることと考えることはずいぶん近くなってきやしませんか」（小林秀雄）

人と出会うということは、生きる幅を広げたり、未だ見ぬ世界を垣間見るきっかけになったり、という意味ではとても素敵なことではあるが、おそらく本能的な感覚としては「怖い」に近いのだと思う。「何秒間に1人の割合で予防可能な感染症によって幼い子どもの命が失われる」、「世界には1ドル以下の収入しか得られない人が何億人もいる」、という言説を我々は情報として認識できる。しかし、実際に厳しい環境下で生きている子ども達に出会うことは、己が持っていた世界の狭隘さと傲慢さを突きつけられることでもある。それもまた出会いの形であり、必ずしも祝福をまとった形では立ち現れない。

牛泥棒という牧歌的な響きとは裏腹な武装集団に襲われ続けたマダガスカルの辺鄙な村では、昨年1年間で子どもが下痢や発熱といった病気で3名亡くなったそうだ。総世帯数が50程度の村で1年間に子どもが3名亡くなるという事態は異常である。牛泥棒は子ども達を直接殺害したわけではないが、牛を奪い、田畑を焼き払うことで彼らの生き抜くための能力を間接的に奪い、そして幼い命を奪っていった。亡くなった子ども達の親の前に立った先進諸国日本から来た私との出会いは、どういった言葉を、表現を可能にするのだろうか？そして不幸なことに私はその亡くなった3人の子どもの名前を知らない。

情報化社会が先進諸国で暮らす我々の生活にここまで根付いてしまうと、学生達の多くが出会いの必要性をあまり感じないのだろう。世界遺産の宮殿を見に行くと立ち入り禁止のことが多いし、いかがわしいガイドが多くて鬱陶しいし、それらガイドのお涙話の多くがテレビや映画から拾い集められた話で脚色された可能性が高いとすれば、長期間の撮影期間を投じて作られた良質な世界遺産特集のドキュメンタリー番組を自宅の居間で4Kテレビを用いて見た方がよいではないか、という意見に反論することは難しい。出会いの怖れと期待に自らの身体をゆだね、接合させることで、自らの世界を考え信じることを始められるのだが、その世界を生きたことのない学生にとって出会いは不確かで怖いものという認識は当然だ。だからこそ教育が持つべき最大で最低限の機能とは、そうした学生が「考えられる」ようになる船出まで、そばで付き添うことなのではないか。そしてその時が来たら、船出を共に祝うことだろう。たとえその先の冒険に猛獣や様々な危険があったとしてもだ。何故そんな危険なことをと言われるかもしれない。でも、それが私が考えたことだからだ。■